

主題	6-8活動でリラックス		
副題	長時間滞在利用者の帰宅前時間の過ごし方		
アクティビティ		長時間利用者	
研究期間	12か月	事業所	高齢者在宅サービスセンター マイホームはるみ
発表者：石原 夏美（いしはら なつみ）		アドバイザー：高橋 紫（たかはし ゆかり）	
共同研究者：鈴木 久美子			
電 話	03-3531-7635	メール	harumi@san-ikukai.or.jp
FAX	03-3531-7625	URL	http://www.san-ikukai.or.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	1991年開設、中央区で初めての特別養護老人ホームに併設の高齢者在宅サービスセンターである。一般デイ(予防含む)40名、認知デイ12名定員の大所帯のデイで、平均介護度は2.9(2012年5月現在)。昨年度までの利用者の利用時間は、4-6時間と6-8時間を提供していた。日中の活動はボランティアが参加したり、併設の老人ホーム、近隣中学校・幼稚園などとの交流も盛んである。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

利用者の帰宅前の時間の過ごし方、特に長時間利用者(以下 6-8 利用者)の過ごし方にばらつきがみられ多くの課題が上がっていた。15:00 頃から利用者が帰り始め、多くの方が帰宅した 15:45 頃以降の時間帯は 6-8 利用者のみとなった。決まった活動なども無く、その日の職員によってボールを使った体操や創作活動などを行う日もあれば、何も活動などを行わない日もあり、全体的にまとまりのない雰囲気であった。当センターではこの時間帯は認知デイ利用者が多く残っていることもあり、退屈したり早く帰りたいとの思いが強くなる様子もみられていた。また、職員側にもこの時間帯に積極的に利用者と何かしなければならぬという意識が低いように思われた。

そこで、帰宅までのこの時間帯に利用者が落ち着いて楽しめる統一した活動はできないかと考え、センター介護員、相談員、機能訓練員が協同して6-8時間に活動を提案していくこととした。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

実施するにあたり以下の2つを目標とした。

- ①長時間利用者に最後まで楽しんで帰っていただく
- ②職員も最後まで利用者に寄り添うという意識をもつ

しかし、帰宅前の時間帯は利用者・職員ともに疲れているという意見も多く、体操や体を動かすゲームなどを行うことは良いとは思われなかった。また、認知デイ利用者が多く残っていることから難しいゲームなどはできず、人員的な問題から職員一人か二人でできるものに限られていた。

そこで、利用者と職員が一緒にリラックスして楽しめる活動を提案していくこととした。内容はアロママッサージやタッチングセラピーなどの利用者と触れ合えるものや紙芝居や映画鑑賞など。そして、センター全体の活動の一部となるよう徐々に主担当職員以外にも任せていけるようにしたかった。

《3. 具体的な取り組みの内容》

対象者：6－8(長時間)利用者

期間：2011年4月～2012年3月

主担当職員：センター介護員、相談員、機能訓練員 全4名

活動時間帯：15：45～16：15 30分間

活動内容：アロママッサージ、タッチングセラピー、紙芝居、創作活動、DVD鑑賞、茶話会など

人員配置：入浴介助に入っていた職員2名

- ①開始にあたり、全介護員にアンケートを実施。アンケートを元に活動内容を決定。
- ②それぞれの活動内容について詳細を記載したマニュアルを作成。アロママッサージとタッチングセラピーについてはリハビリ課から職員へ伝達指導実施。
- ③月間活動表を作成。活動は日替わりで、活動表を作る職員が前月までに決め、当日までに必要物品を用意。
- ④その日の担当職員2名が活動表とマニュアルに沿って活動を実施

○活動に参加したくない利用者は無理には誘わず見学してもらったり、別のことをして過ごしてもらった。

○何度か活動を行ったところで、活動風景の写真を撮影し、報告として施設全体へも配信した。

○当初は主担当職員が活動表を作成し、紙芝居を借りに行くなど物品の用意を全て行っていたが、4か月を過ぎたあたりで他の職員の月ごとの担当制としていった。

○6か月を過ぎたところで、介護員に経過についてのアンケートを実施。

《4. 取り組みの結果と考察》

職員全体に浸透するには時間がかかり、定着するまでには半年以上の時間を要した。しかし、活動を行った職員からは「アロママッサージは自分のためにもなる」、「利用者も喜んでいる」などの声が聞かれた。また、当センターは利用者の人数

が多く、全員の利用者と深く関わるのが難しい状況であったが、6－8活動は10人未満の少人数で行うことが多く、利用者と密接に関われることを喜んでいる職員もいた。利用者も喜んでいる様子が見受けられた。

利用者全体がまとまって全体に目が届きやすくなり、職員も手持ちぶさたに感じるものが少なくなった。また、定着するにしがたって職員の最後まで利用者に寄り添うという意識が向上したように思われる。

《5. まとめ、結論》

今年度の介護報酬の改定により、利用者の滞在時間が当センターでは5－7時間と7－9時間へ変更となった。それに伴い、職員配置や勤務時間を変更し、手薄になった帰宅前の時間帯にどのように活動を提案していけるかが今後の課題となっている。しかし、職員が自主的に紅茶などを利用者に提供したり、紙芝居などを実施する職員もあり、昨年度の6－8活動からの意識の継続がみられている。現在は「7－9活動」として以前のような活動の実施を試行中である。今後も帰宅前の新たな活動時間の提供により、職員は利用者に寄り添いながら、利用者にとって居心地の良い空間作りを目指していきたいと考える。

《8. 提案と発信》

他施設からも長時間利用者の帰宅までの時間の過ごし方については、持て余しているという声が聞かれていました。介護報酬の改定により、さらに利用時間が長くなった施設も多くあると思います。より一層帰宅前の時間帯の活用方法について検討する必要が出てきた中で、今回の当センターの取り組みが参考になれば幸いです。

【メモ欄】